

杜甫の詩を使った中期朝鮮語教材の開発

矢野 謙一

はじめに

熊本学園大学東アジア学科では3年生以上に選択科目として中期朝鮮語（以下、中期語と呼ぶ）の講読科目を開設している。現代語を1、2年次に学んだ学生を対象に15世紀の諺解を教材に読解を教える。隔年で開講されるが、その手ほどきはたやすいものではない。10年程前、偶然に『分類杜工部詩諺解』にある漢詩を材料としたところ効率よい中期語の手ほどきとなった。本資料は、それ以後、数回にわたり手を加えて作った中期語の入門用の読解教材である。

組み立ては、まず文字と音韻を概観し、次にごく簡単に形態の交替について説明する。読解の材料としては、高校で学ぶ「春望」をとりあげ、漢文、書き下し文、諺解文の順に並べている。これは漢字文化圏に属する日本と李氏朝鮮で漢文をそれぞれの言語で訳しており、対照することで諺解を分析する手がかりとするためである。その後に短い形式の詩を取り上げ、次第に長い形式に進んでゆく。このとき文法の説明は簡単にしか触れていない。この教材は1学期15回の講義で終わっている。

「春望」は最初に読む諺解となるため、句ごとに単語の対訳を示し、文法形態をひとつずつ説明を加え、曲用や活用を説明する形式をとる。単語の対訳の形式は「푸르다[形] (碧) 深緑色だ。」のように中期語の理論形、品詞、原文に使われた漢字、対訳の順となっている。これは漢字は「意味の衣」と言われるように、原文に忠実に意味を推測させる目的がある。なお、文法形態は漢文に使用された言語の類型が孤立語であり、中期語が膠着語であるため、原文には対応する漢字

は存在しない。

中期語は国内では数か所の大学で教えられているが、朝鮮語学の研究対象として扱われ、その前の段階である読んで諺解の文に親しむ段階は、学生の自主的な学習に任されている印象がある。かつ、この段階では、現代語の知識で『古語辞典』などを道具として使うことが前提となっている。かなり高度の知識が要求される。一方、諺解は漢字文化圏における漢文を受容するための一形態であり、書き下し文もまた同様である。この漢字文化の受容の共通点に注目し、ここではハングルの読み方がわかれば、漢文、諺解、書き下し文を対照し、これらを手がかりに中期語の読解を進めることができるようにした。辞書を引く手間をはぶき、書き下し文と漢字を媒介として、意味を把握し、中期語の文を分析できるように作っている。また朝鮮語史と関連させるため、重刊本の表記と対照させ、言語の変化にも注意を行くように配慮している。

I 基礎的な知識

1 文字

李朝の言葉は1446年に創製された「訓民正音」で書かれる。現在のハングルは、20世紀の初めに「訓民正音」を近代の朝鮮語を表記できるように改変したものである。中期語に使われる文字は今のハングルとは少し違いがある。「訓民正音」は創製時に「諺文」と呼ばれた。これは中国の文字「漢文 (한문)」に対して郷土の文字「諺文 (언문)」と対比させた名称である。

1-1 母音を表す文字

今のハングルと異なる点は、まず今の10字に아래아と言う「·」1字が加わる。読み方は[ʌ]である。英語のbus, cut, muchの母音である。順序は今の10字の最後に付ける。この順序で縦書すると一番下に来るので、「아래아」すなわち、「下の아」と言う。

ㅏㅑ ㅓㅕ ㅗㅛ ㅜㅠ ㅡㅟ ㅡ ㅣ、 (11字)

1-2 子音を表す文字

現行のハングルにㅃ ㅅ ㅆ ㅈ の4字が加わる。ㅃの読み方は[β]、ㅅの読み方は[z]、ㅆの読み方は[ŋ]、ㅈは声門閉鎖音（濃音）を表す記号である。並べる順序は諸説あるが、ここでは、次の順序で並べておく

ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㅁ ㅂ ㅅ ㅆ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㆁ ㆁ ㆁ ㆁ (18字)

子音字はㅃはㅂの下にㅇをつけ、ㅅはㅅの下に一をくわえ、ㅆはㅆのてっぺんに、をえりんのうような形にし、ㅈはㅈを書く要領で、を省くと書ける。

1-3 文字の合成

文字の合成は「訓民正音」で文字数を増やす基本となる方法である。

母音字は、(天)、一(地)、ㅣ(人)の3字が基になる。、(天)と一(地)を合成した文字がㅗㅛ ㅜㅠ の4字、、(天)とㅣ(人)が合わさった字がㅏㅑ ㅓㅕ の4字である。さらにこれらの文字のうち、ㅗとㅓを合成してㅑ、ㅜとㅕを合成してㅕがつくられる。

ㅏㅑ ㅓㅕ ㅗㅛ ㅜㅠ ㅡㅟ ㅡ ㅣ、ㅑ ㅕ (13字)

これらに]の一面をくわえて、12字がさらに合成される。

ㅑ] ㅕ] ㅗ] ㅛ] ㅜ] ㅠ] ㅡ] ㅟ] ㅡ] ㅣ] ㅑ] ㅕ] (12字)

これら12字は、現代語と違って、すべて重母音で読まれる。

、] [Δi] 𐄂 [ai] 𐄃 [jai] 𐄄 [ci] 𐄅 [jci] 𐄆 [oi] 𐄇 [joi]
𐄈 [ui] 𐄉 [jui] 𐄊 [wi] 𐄋 [uai] 𐄌 [uci]

文字の構成の原則は基本母音字10字とアレアを書き、その後ろに𐄆𐄈を足して、13字とし、その13字に]の画をくわえて合成するが、]には]が付かないので省いてさらに12字が加わる。

子音字の合成は、各自並書と合用並書の2つの方法がある。各自並書はそれぞれ同じ文字を並べて書いて子音字を合成する。合用並書は異なる文字を合わせて用いて並べ書く。

各自並書 𐄂 𐄃 𐄄 𐄅 𐄆 𐄇 𐄈 𐄉 (8字)
合用並書 𐄊 𐄋 𐄌 𐄍 𐄎 𐄏 𐄐 𐄑 𐄒 𐄓 (10字)

各自並書の読み方は、𐄂 𐄃 𐄄 𐄅 𐄆 𐄇 𐄈 𐄉は今と同じで濃音で、𐄈𐄉は𐄈の摩擦をより強くした摩擦音、ooは後ろに来る[i][j]を強く長く発音し、𐄌𐄍は[n]の長音である。合用並書の読み方は、文字を使い分けしていることを根拠に、ここでは表記通りの子音群で発音をしていたという見方をする。例えば、𐄊は[pt]と読む。

合用並書は子音字2字を合用した並書と子音字3字のを合用した並書がある。子音字2字の合用並書は、𐄊ではじまる系列と𐄎ではじまる系列に分けることが出来る。子音字3字の合用並書は𐄑ではじまる。

𐄊ではじまる系列 𐄊 𐄋 𐄌 𐄍
𐄎ではじまる系列 𐄎 𐄏 𐄐
𐄑ではじまる系列 𐄑 𐄒

1-4 傍点

中期語には、現代の慶尚道や咸鏡道の方言と同じように高低アクセントがある。音の高低を、文字の左側に点をつけて表す。これを傍点という。次の文は『訓民正音諺解本』の傍点の説明文である

「點:뎨.이:업스.면平聲.이.오」 点がなければ平声である。

よく見ると、:뎨は뎨のよこに「:」が付いている。.이는이의横に「.」がついている。스には何も付いていない。点のないものは平声といい低い音、一点は去声といい高い音、二点は上声といい、低い音から高い音に上がる音である。いくつかの語は、このアクセントの違いで単語を区別するが、解釈ではほとんどの場合、無視しても支障ない。ここでは注意を喚起するにとどめる。

2 音韻

中期語の音韻について諺文を使い説明する。

2-1 母音

単母音は ㅏ ㅓ ㅜ ㅡ ㅗ ㅛ である。(7音)

母音調和があり、母音は、陽、陰、中立に分類される。

陽	ㅏ	ㅓ	ㅜ
陰	ㅗ	ㅛ	ㅝ
中立	ㅚ	ㅞ	

二重母音は j 系列と - j 系列がある。

j 系列	ㅘ	ㅙ	ㅚ	ㅞ	(4音)		
- j 系列	ㅗㅘ	ㅛㅙ	ㅜㅚ	ㅡㅞ	ㅝㅞ	ㅚㅞ	(6音)

三重母音は j 系列と w 系列がある。

j 系列 ㅈ ㅊ ㅊ ㅊ (4 音)

w 系列 ㅊ ㅊ (2 音)

2-2 子音

初声 (音節頭の位置)

単子音 (22音)

ㅂ	ㅃ	ㅍ	ㅍ	ㅍ
ㄷ	ㄸ	ㅌ	ㄴ	ㄹ
ㅈ	ㅉ	ㅊ		
ㅊ	ㅊ			ㅊ
ㄱ	ㄲ	ㅋ	ㅇ	
	ㅅ	ㅎ		

中期語の特徴は語頭に子音群が来ることである。

語頭子音群 (10群)

ㅂ系列	ㅃ	ㅃ	ㅃ	ㅃ
ㅊ系列	ㅃ	ㅃ	ㅃ	
ㅊ系列	ㅃ	ㅃ		

終声 (8 音)

単子音 ㅂ ㄷ ㄱ ㅊ ㄴ ㅇ ㄹ

複子音 ㄹㅂ ㄹㄷ ㄹㅊ ㄹㄴ

ㄹㅂ は ㄹ の後ろの 歯茎音が濃音になることを表す。

2-3 子音交替

子音が連続すると、発音しやすいように片方の音が他の音と交替するか、脱諾する。

ㅎ ㅎの後ろにㅂㄷㄱㅌがくると有気音化して、ㅃㅆㅋㅌになる。

例 녕+고 ⇨ 녀코 녀다>녕다 (現代語)

ㅎの後ろにㄴがくるとㄴは濃音になってㅆになる。

例 녕+습고 ⇨ 녀습고

ㅎの後ろにㄹがくると、ㅎはㄷと文字が変わり、ㄷㄹになる。

例 녕+눈 ⇨ 녀눈

ㅃとㄷㅌ ㅃとㄷㅌは後ろにㄷㅌㅌㅌがくると無気音化してㅃとㄴになる。

例 돌+고 ⇨ 돕고 웃+고 ⇨ 웃고 それぞれ現代語は돕다、웃다である。

ㄷ ㄷは後ろにㄹがくると鼻音化する。これは一部の単語の表記に現れている。

例 건너 ⇨ 건너 ㄷ니 ⇨ ㄷ니 건너다 (渡る) ㄷ니다 (行く)

過去を表す-더-, 詠嘆を表す-도-, などはㄷがㄹになり-려-, -로-になる。

ㄷはㄹと]の後ろで消える。

例 알+고 ⇨ 알오 ㄷ외+고 ⇨ ㄷ외오

2-4 j 挿入

-j で終わる母音] ㅃ,] ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ ㅃ の後に母音が来ると間に[j]が介入し、それを文字に表す。例えば、예「に」助詞は]終わりの母音の後では예となる。例 〈龍4〉「野人ㅃ 서리에 가샤」(昔から住んでいた人たちの間に行かれ)

2-5 指定詞

指定詞이다の音の交替は現代語とやや違う。이다は이라になる。子音の後ろでは、子音と結合し音節を作る。말+이오は마리오になる。母音の後ろでは、前の音節と結合して-j系の二重母音を作る。바+이다は배라になる]の後ろでは]は省略される。

3 活用

『分類杜工部詩諺解』を読むのにまず留意すべきことだけを説明する。

3-1 ㄷ語幹

ㄷ語幹は語幹がㄷでおわる用言の総称である。ㄷ語幹とㄴㄷㅌㅍㅈで始まる語尾が結合すると、ㄷが脱落する。この現象は15世紀にもあったが、現代語とは少し異なっている。

例

ㄴ：〈杜初10.17才〉「긴 히예」長い日に、〈龍75〉「爭長之言을 아니 거스니」自分が長であるという諍いにあらがわず

ㄷ：〈龍49〉「님그미 나가려 히샤 도즈기 셔블 드더니」王様が行幸為されようとする時賊が京に入ってきて (들+더니)

ㅌ：〈杜初16.18才〉「머리 세드룩 서르 브리디 마저 히더라」白髪頭になっても互いに棄てないと言っていた (말+저)

ㅍ：〈龍51〉「軍容이 네와 다르샤 아습고」、軍の威容が昔と異なられていることを知りたてまつり、「置陣이 늑과 다르샤 아ㅍ보디」布陣が他と異なれると知りたてまつるが (알+습)

3-2 ㅍ格用言

『分類杜工部詩諺解』ではㅍ変格用言は現代語と同じく、母音の前ではㅍは[w]となっている。用言の中には、語幹末音がㅍであるとき、母音が後ろに来ると

ㅅはㅅ/ㅆになるものがある。ㅅは語幹の母音が陽母音の時に現れ、ㅆは語幹の母音が陰母音の時に現れる。もともとㅅがㅆに交替していたが、時代が下がるにつれ、ㅅはㅆに交替せず [w] に交替する。『分類杜工部詩諺解』では既に [w] に交替している。

II 解説

漢文は『分類杜工部詩諺解』の原文をそのまま載せている。書き下し文はほとんど『杜甫全詩訳注』によっている。諺文は어디메から転記したが、著者が影印本を対照し、必要に応じて手を加えた。「諺解」とは15世紀の朝鮮で漢文を翻訳し、当時の諺文表記法で書いた文である。諺解は漢文を訳した文体で、当時の朝鮮で慣用で行われていた読み下しを表記したもので話し言葉を忠実に反映したものではないと考えられる。

1 春望（その1）國破山河在 城春草木深

15世紀の朝鮮で訓民正音はもっぱら漢文の翻訳に使われた。日本と同じ漢字文化圏に属することを利用して、漢文と日本の書き下し文、諺解を対照しながら古語の解釈をする。まずは、杜甫の「春望」を取り上げる。李朝では1481（成宗12）年に『分類杜工部詩諺解』という書名で活字本で翻訳が出版された。25巻19冊本である。1632（仁祖10）年に重刊された。

春望

國破山河在 城春草木深

国破れて山河在り 城春にして草木深し

나라히 破亡하니 외와 ㄹ름쑤 잇고 잣 안 보미 플와 나모쑤 기꺽도다

感時花濺淚 恨別鳥驚心

時に感じては花にも涙を濺ぎ 別れを恨みては鳥にも心を驚かす

時節을 感嘆호니 고지 ㄴ름를 쓰리게 코 여희여슈물 슬후니 새 ㅄ속물 놀래낫다

烽火連三月 家書抵萬金

烽火三月に連なり 家書万金に抵たる

烽火| 석 두를 니세시니 지빛 音書는 萬금이 스도다

白頭搔更短 渾欲不勝簪

白頭搔けば更に短く 渾て簪に勝へざらんと欲す

센 머리를 글구니 쏘 더르니 다 빈혀를 이긋디 모홀 듯 호도다

(春望 杜初10.6ウ)

1-1 國破山河在

国破れて山河在り 나라히 破亡키니 외과 ㄴ롬썸 잇고

語釈

나라히[名] (國) く。 - [助詞] ~가。破亡키다[用言] (破) ほろびる。 -니 [接続語尾]。외히[名] (山) やま。 -과[助詞] ~と。 -과と名詞の終わりの히が結合した形態。ㄴ롬[名] (河) かわ。 썸[名] ~だけ。 잇다[動] (在) いる。 ある。 -고[接続語尾]

文釈

「國破山河在」の書き下し文は「国破れて山河在り」である。諺解は「나라히 破亡키니 외과 ㄴ롬썸 잇고」である。この句を分節すると나라히 (国) + | (가) + 破亡키 (ほろび) + 니 (接続語尾) + 외히 (山) + 과 (と) + ㄴ롬 (かわ) + 썸 (だけ) + 잇 (ある) + 고 (接続語尾) である。和訳は、「国が滅びて山と川だけがあり」となる。

解説

1) 文字遣い

ここでは、文節を単位に分ち書きをしているが、古語の文字遣いは、分ち書きをしない。そのまま続けて書き下ろす。しかも縦書きである。現代の綴り字法では、単語の形態が見て分かるようにハングルを組み合わせるが、古語では実際に発音された音節通り書く。下の例の(イ)は原文を横書きにしたもの、(ロ)

は現代の正書法の原則に従って書き換えたものである。

(イ) 나라히破亡키니뫼과 ㄹ흠썌 잇고 잣안보미플와나모썌기꺽도다

(ロ) 나라이 破亡키니 뫼과 ㄹ흠썌 잇고 잣안스 봄이 플와 나모썌 깊어잇도다

古語を読む時は、まず書かれた文字を形態に分節することが必要となるが、以下は、入門段階と考えここでは分ち書きをした文にかえている

2) 語末にㅎが表れる名詞

「나라히 破亡키니」は「國破」の諺解で、書き下し文は「国 破れて」となる。「破亡키니」の「破」は「破れる」、「亡」は「亡くなる」と言う意味、「니」は文脈と現代語から接続語尾と推測できる。「나라이」の「이」は、現代語と同じ主格助詞「～が」である。「나라」は「国」であることは間違いないが、現代語は나라なのに、ここでは語末に「ㅎ」が現れている。中期語の名詞には語末にㅎがあり、助詞と結合すると名詞と助詞の間に「ㅎ」が表れる。例を挙げると、ㅉ(地) 하늘(天) 길(道) 내(川) 시내(溪) ㄹ술(秋) 나조(夕) 우(上) 뒤(後) 안(内) 뫼(山) 밭(野) 드르(野) 들(梁) 출처(源) 썌(根源) ㅉ(村) 뜰(庭) 수(藪) 움(窟) など多く見て100語ほどある。助詞が付いた形を書くと、자히로(尺で) 드르헤(野に) 뒤헤(後に) 내히(川が) 움(穴を) 안해(内の) 열히(十の) 갈해(刀に) 하늘히(天が) などである。

3) -와/과「～と」助詞

「뫼과 ㄹ흠썌 잇고」は「山河在」の諺解で、書き下し文は「山河 在り」となる。뫼は「山」、山または墓を意味する語で助詞と結合するとㅎが現れる名詞である。方言に[moi][mø][me:]という語形が残っている。日本書記はさらに古い語形を記録している。朝鮮半島の地名で「山」を「ムレ」と読んでいる。古語の用例は「深山은 기픈 뫼히라」(深山は深い山である)〈月釋1.5註〉等がある。ㄹ흠は「河」に相当する語で、現代語では廢語である。古語の用例は「ㄹ꺽매 비 업거늘」〈龍20章〉(河無舟矣/河に舟が無く)などがあり、「河」の字が当てられている。

과は뫼 + 과で、외に-과がついて、名詞と格助詞の間にㅁが出現し、ㅁとㄱが結合し有気音になった形である。-와は母音とㄹの後ろで使われ、-과はㄹ以外の子音の後ろで使われる。

4) 쯔는 数量・程度を表す形式名詞の一つで、現代語では昱に変化している。意味は現代語と同じで「だけ、のみ」である。他の用例を挙げると、「이쯔 아니라 너나뫼 祥瑞도 하뫼」(これだけでなくそのほかの祥瑞も多く)〈月釋2.48〉などがある。

5) 잇는 現代語の있다(ある)の語幹に相当する。「在」の訳語に使われている。

6) -고は接続語尾で、現代語と同じである。ここでは文と文を対等につないでいる。詩の句が切れるので-고で文を成立させ、次の文につないでいる。接続語尾-니は-고より小さい単位を接続する。

1-2 城春草木深

城春にして草木深し ㅈ 앓 보미 플와 나모쯔 기뫼도다
語釈

ㅈ[名](城) 城壁に囲まれた都市。안ㅁ[名]内。ㅍ[助詞] ~の。봄[名](春) はる。-,|[助詞]~の。플[名](草) くさ。-와[助詞]~と。나모[名](木) き。쯔[名]~だけ。깊다[名](深) ふかい。-어-[連用形語尾]。ㄹ[動]ある。-도다[終結語尾]詠嘆を表す。

文釈

「城春草木深」の書き下し文は「城春にして草木深し」である。諺解は「ㅈ 앓 보미 플와 나모쯔 기뫼도다」である。この句を分節するとㅈ(城) + 안ㅁ(内) + ㅍ(の) + 봄(春) + ,|(~に) + 플(草) + 와(~と) + 나모(木) + 쯔(だけ) + 깊 + 어(連用形語尾) + ㄹ(ある) + 도다(終結語尾)である。和訳は、「都市の内の春に草と木だけ茂っている」となる。

解説

1) -이/의とㅅ

「**жат 안 보미**」は「城春」の諺解で、書き下し文は「城 春にして」である。

жатは「城」で、「**城은 자시라** (城はжатである)」〈月釋1.6註〉と書かれた註が残っている。この註から城がжатと分かる。なお「城」は全体を城壁で囲んだ町をいう。日本書紀にはさらに古い形が残っている。朝鮮半島の地名で「城」を「サシ」と読んでいる。古代日本語のサ行子音は[ʃ]だったという説もある。안は안ㅎ(内)に「～の」を表すㅅがついた形態である。봄は春。-,.]は本来「～の」を表わす助詞である。

古語で「～の」を表す形態は、ㅅと-이/의がある。ㅅは人間など逃げる者につくと、尊敬の意を含み、物(逃げない物)につくと単に文法機能のみを表す。例えば、「**아바님 뒤헤 서샤** (お父様の後ろにお立ちになり)」〈龍28〉「**나라트 말썸**」(国の言葉が)〈訓諺〉の違いがある。-이/의は人間や動物(逃げるもの)につくと、「～の」意味を表すだけで、尊敬の意味は含まない。-이/의の使い分けは母音調和の規則に従い、陽母音の後ろで-이、陰母音の後ろで-의を使う。

-이/의は「～の」助詞としても「～に」助詞としても使われる。例えば、「**員의 지빅 가샤** (役人の家にお行きになり)」である。ここで「**員의**」の「**의**」は「～の」で使われているが、「**지빅**」の「**의**」は「～へ/に」の意味で使われている。「の」意味であるか「に」に意味であるかは、人間や動物(逃げるもの)につくと、「～の」で、物(逃げないもの)につくと「～に」とする。ちなみに現代語でも-의「の」と-에「に」は字形は違うが、ともに[e]で同じ音である。「**жат 안 보미**」の和訳は「城壁で囲まれた町の中の春に」となる。

-이/의は連体修飾句の中では主語を表すこともある。「お父さんの焼いたサンマ」＝「お父さんが焼いたサンマ」。

2) -도다 詠嘆の語尾

「**플와 나모썸 기뻐도다**」は「草木深」の諺解で、「草木 深し」の部分である。

플は草、現代語では풀、**나모**は木、現代語では나무である。-와「～と」、-썸は

前に説明した。기꺾은는複雑である。こんな時はローマ字に転写し音読みすると、わかりやすくなる。kipho itt'oda つまり깊어 잇도다で、「깊어 잇 (深くあり)」、深い状態で存在していることを表す。-도다は用言語幹について感情を込めて述べていることを表す終結語尾である。『分類杜工部詩諺解』には多く使われている。

3) 音の変化

『分類杜工部詩諺解』から現代語への音の変化をみってみる。現代語と比べると、次のことが分かる。

· > ㅏ : ㅎ다 > 하다 ㅈ > ㅉ : ㅅ > ㅆ ㅡ > ㅓ : ㅍ > ㅑ ㅓ > ㅕ : ㅓ > ㅕ

1632年の重刊『分類杜工部詩諺解』のこの箇所とも比べてみる。

「나라히 破亡 ㅎ니 되과 ㅍ름썸 잇고 잣 앓 보미 ㅍ와 ㅓ모썸 기꺾도다」(初刊本)

「나라히 破亡 ㅎ니 되과 ㅍ름썸 잇고 잣 앓 보미 ㅍ와 ㅓ모썸 기꺾도다」(重刊本)

全く同じ表記である。現代語への音の変化は重刊本が出た1632年以後に起こったとわかる。

2 春望 (その2) 感時花濺淚 恨別鳥驚心

2-1 感時花濺淚

時に感じては花にも涙を濺ぎ 時節을 感嘆호니 고지 눅므를 쓰리게 코

語釈

時節[名](時)時代。-을[助詞] ~を。感嘆호다[動]感じ嘆く。-니[接統語尾]

꽃[名](花)はな。-[助詞]~が。눅므[名](涙)なみだ。-를[助詞] ~を。

쓰리다[動](濺)そそぐ。-게 ㅎ다[連語]~させる。-고[接統語尾]。

文釈

「感時花濺淚」の書き下し文は「時に感じては花にも涙を濺ぎ」である。諺解は「時節을 感嘆호니 고지 눈믈를 쓰리게 코」である。この句を分節すると時節(時代) + 을(を) + 感嘆(感じて嘆く) + 니(接続語尾) + 꽃(花) + ㅣ(が) + 눈믈(なみだ) + 을(を) + 쓰리(そそぐ) + 게(ように) + き(し) + 고(接続語尾)である。和訳は、「時代を嘆いて花がなみだをそそがせる」となる。호は次の句で説明する。

解説

1) 「を」助詞

「時節을 感嘆호니」は「感時」の諺解で書き下し文は「時に感じては」である。日本語の「を」に当たる助詞は古語ではㄹ 올 을 ㄹ 를 の5つの形態を使い分ける。-ㄹは母音の後ろ、-올/을は子音の後ろで使う。「ㄴ」「ㄹ」は子音の連続を避けるための介入母音で、使い分けは母音調和規則による。-를/를は母音の後ろで使う。-ㄹにさらに-올/을がついて出来た形態である。用例は次の通り。

ㄹ 「뱀야미 가칠 ㄹ러 (蛇が鵲を啜えて)」〈龍7〉

을 「말씀을 ㄹ부리 하디 (お話申し上げようとしたが)」〈龍13〉

을 「붉근 새 그를 ㄹ러 (赤い鳥が文を啜えて)」〈龍7〉

를 「世子를 하늘히 ㄹ히샤 (跡継ぎを天が選ばれ)」〈龍8〉

를 「我后를 기드리스ㅅㅅ (周朝の武王をお待ち申し上げ)」〈龍10〉

動詞がどの格助詞を取るかを、動詞の格支配と言うが、日本語と同字の漢字語でも格支配は異なる。この詩の中で「感嘆」は을を取っている。「時節」の意味は、実際の世の成り行き、その時代の状況、「感嘆」はなげき悲しむことである。

2) 使役表現 게+ㅎ

「고지 눈믈를 쓰리게 코」は「花濺淚」の諺解で、書き下し文は「花にも涙を濺(そそ)ぎ」である。고지は꽃+ㅣ, 꽃は花で、現代語は꽃になっている。ㅣは「～が」助詞である。「が」助詞については次の節で詳しく述べる。눈믈를は

눈물 + 를, 눈물은現代語で눈물で涙。語形成は눈(目) + 스(の) + 물(水)である。를は「～を」。쓰리게 코는쓰리+게+키+고と分節できる。쓰리다は現代語で뿌리다, 눈물을 뿌리다は現代語でも「涙をながす」である。

게 코は、게+키+고で、키+고が縮約した形である。-게 키다는現代語の使役、動詞語幹+게 하다と同じ。使役とは、自分の意思でなく、他から何か影響を受けて、その動作することを表す。「고지 눈물을 쓰리게 코」の和訳は「花が涙を流させて」となる。

2-2 恨別鳥驚心

別れを恨みては鳥にも心を驚かす 여희여슈물 슬후니 새 마음 놀래나다
語釈

여희다[動] (別) 別れる。-어-[連用形語尾]。있다[動]いる。ある。-ㅁ[名詞転成語尾]。-을[助詞]～を。싫다[動] (恨) うらむ。かなしむ。-니[接続語尾]。새[名] (鳥) とり。마음[名] (心) ころ。-ㄴ[助詞]～を。놀래다[動] (驚) 驚かせる。-나다[終結語尾]。

文釈

「恨別」の諺解「여희여슈물 슬후니」の文釈は解説に詳しく述べている。새 마음 놀래다는「鳥驚心」の諺解で、書き下し文は「鳥にも心を驚かす」である。

새は「鳥」で今も同じ。마음は「心」、今は마음に変わっている。을は「～を」助詞、놀래다는他動詞で「驚かせる」、놀라다「驚く」の使役形、語構成は놀라+이+다である。現代語も놀라다で同形。

解説

1) 分析法の一例

「여희여슈물 슬후니」は「恨別」の諺解で、書き下し文は「別れを恨んでは」である。「여희여슈물」は複雑な構造であるが、こういう場合、ローマ字に転写して分析することは述べた。johwi+(j)ㄴ+sjum+wulつまり여희+(여)+시+움と

分節できる。여희다は別れる、(여)は連用形語尾어だが、前の音が[i]で終わっているので、わたり音[j]が入る。시は存在詞、今は있다 1つだけだが、当時は있다 이시다と시다の3つの形態があった。

2) -오/우-語尾

-음/움は用言を名詞に転成させる語尾、使い分けは母音調和の規則に従う。中期語には用言語幹に-오/우-がつく現象がある。既に「時節을 感嘆호니」で登場している。この語尾の機能については定説がなく、諸説ある。活用の全体像は分かっている。-오/우-の使い分けは母音調和の規則に従う。但し、用言の語幹末音がㅏ / ㅣのときは表れない。過去を表す-더-と結合すると-도-、敬語の-시-と結合すると-샤-、指定詞이다と結合すると-ㅣ로になる。語尾の中には必ずこの-오/우-の後ろに使われるものがある。-오/우디と-음/움である。一方、連体形語尾の-ㄴや-ㄹ、接続語尾の-니、-느니等の文法形態のほとんどは-오/우-を取ったり取らなかつたりする。-오/우-の機能については、ここでは特定の動作・状態を示すという立場から解説を進めてゆく。「슬후니」は動詞슬다は「心に傷がのこる」、「心を痛める」という意味である。語幹슬に-우+니がつき、杜甫自身の心の状態であることを述べている。「여희여슈물 슬후니」の和訳は「別れていることを悲しむ」は杜甫の心情である。

3) -느다

-느다は、現在の目の前で進行していることを述べる語尾である。今の-ㄴ다/는다に相当する。「새 막수물 놀래느다」の和訳は-느다を意識して訳すと「鳥が心を驚かせている」となる。

4) 音の変化

『分類杜工部詩諺解』の語と現代語と比べると、次のことが分かる。

ㄱ > ㄲ : 꽃 > 꽃 ㅎ > ㅈㅇ : 여희다 > 여의다 ㅏ > ㅓ : 막숨 > 마음 ㅓ > ㅕ : 막숨 > 마음
で「ㅓ」が様々に変化している。눈므를 > 눈믈를 놀래느다 > 놀래노다。
次に、「막수물」から「막우물」への変化からㅏ > ㅓへの変化が分かる。

1632年の重刊『分類杜工部詩諺解』のこの箇所とも比べてみる。

時節을 感嘆호니 고지 늬므를 썩리게 코 여희여슈물 슬후니 새 모으물 놀래노다」
(初刊本)

時節을 感嘆호니 고지 늬믈를 썩리게 코 여희여슈물 슬호니 새 모으물 놀래노다」
(重刊本)

「・」の混乱がみられる。△ > ○変化は初刊本が印刷された1481年から重刊本が出た1632年までに起こったと考えられる。

3 春望 (その3) 烽火連三月、家書抵萬金

3-1 烽火連三月

烽火三月に連なり 烽火] 석 드를 니세시니

語釈

烽火[名](烽火)のろしの火。- [助詞] ~가。석[数](三)三の。세 ㅅ의連体形。
달[名](月)つき。ひと月、ふた月の月。- ㄴ[助詞] ~을。닐다[動]入変(連)
続く。- ㅓ-[連用形語尾]。] 시다[動]いる。ある。-니[接続語尾]。

文釈

「烽火連三月」の書き下し文は「烽火三月に連なり」である。諺解は「烽火] 석 드를 니세시니」である。この句を分節すると烽火(のろしの火) +] (が) + 석(三) + 들(月) + ㄴ(を) + 닐(続く) + ㅓ(て:連用形語尾) +] 시(いる) + 니(て:接続語尾)である。ここで니세시니はローマ字転写するとnizoisini である。nizは動詞の語幹で、ㅓは]で連用形語尾、isiは이시다(在る/いる)の語幹、니は接続語尾である。和訳は、「のろしの火は三月続いている」となる。

解説

1) 「が」助詞の表記

「烽火」の「]」は「が」助詞を表す。当時は母音の後につく「가」はなく、すべてiであった。名詞がiで終わるときは表記しない。漢字語と固有語で少し違いがある。漢字語の後では次のように書き分けていた。母音終わりの漢字語「]」 「烽火」(のろしが)。子音終わりの漢字語「이」 「諸佛이(もろもろの仏が)」(釋譜

13.4)。固有語の後では、母音終わりの固有語は]を加えて-j系列の二重母音と三重母音として表記する。「부테 (仏様が)」 불터「仏様」+]「が」〈釋譜13.1) 子音終わりの固有語は前の子音と結合させて表記する。「부름미 (風が)」 부름「風」+]「が」〈釋譜13.16)

iは日本語の「が」と異なった用法もある。「～になる」「～となる」の「に」や「と」にはiを使う。

시미 기픈 므른 ㄹ마래 아니 그출씨 내히 이리 바래래 가느니 〈龍2〉

源が深い水は日照りに止まらないので川になり海に行く

「～とおなじ」の「と」はiを使う。

古聖이 同符키시니 〈龍1〉 昔の聖人と同じであらせられる

日月燈明은 智慧 ㄹ마샤미 日月燈 이 곧키실씨니 〈釋詳13.28才〉 日月燈明は智慧が慧なることが日月燈と同じであるが故に

2) ㄹ変格活用

ㄹはㄹ変格活用ㄹ다の語幹末子音が交替した形である。他動詞で漢字は連、意味はつらねる、つなぐ、続けるの意味である。現代語の形は잇다でやはりㄹ変格活用で、意味は変わっていない。この時代のㄹ変格活用は、語幹末子音は子音が後続するとㄹで現れ、母音が後続するとㄷで現れる。子音の前の例 ㄹ게 母音の前の例 니시。これは当時、ㄹは、母音+ㄹ+母音のように母音の間にくると有声音化し、[s]が[z]になったためである。当時のㄹ変格活用はㄹが脱落せずㄷに交替した。

3) 語頭のㄹ

さらに、この時代のㄹと表記されていた語幹は、現代語では잇と表記される。語頭のㄹが現代語では消えている。現代語では語頭のㄹは[i][j]の前で脱落するが、当時はこの規則は働いていなかった。例えば現代語の잎「葉」は「ㄹ」だった。「이른 남지 새 ㄹ 나니이다 (枯れ木に新しい葉が出たのです)」〈龍84)。

3-2 家書抵萬金

家書萬金に抵たる 지빛 音書는 萬金이 스도다

語釈

집[名](家)いえ。-로부터[助詞] ~から。音書[名]便り。-는[助詞]~は。萬金[名]たくさんのお金。-이[助詞]~が。스다[形](抵)値する、相当する、値打ちがある。-도다[終結語尾]。

文釈

「家書抵萬金」の書き下し文は「家書萬金に抵たる」である。諺解は「지빛 音書는 萬金이 스도다」である。この句を分節すると집(いえ) + 부터(から) + 音書(便り) + 는(は) + 이(が) + 스(相当する) + 도다(終結語尾)である。和訳は、「家からの便りはたくさんのお金に値する」となる。

解説

1) 잇助詞

지빛は「家書」の諺解で、지빛は 집+잇, 집は家で現代語もおなじ。잇は助詞で、의(に) + 스(の)と助詞の合成である。ここでは「(から)の」と解釈する。

2) -는「は」助詞

-는は「は」助詞に相当する。現代語では는である。この当時は-ㄴ/은/은/는/는の使い分けがあった。この使い分けは「を」助詞と類似している。-ㄴ/는/는は母音の後、-은/은は子音の後、「ㄴ」と「一」の使い分けは母音調和の規則による。

3) 音の変化

1632年の重刊『分類杜工部詩諺解』のこの箇所とも比べてみる。

烽火] 석 ㅌ를 니세시니 지빛 音書는 萬金이 스도다 (初刊本)

烽火] 석 ㄷ를 니어시니 지빛 音書는 萬金이 스도다 (重刊本)

まず、ㅌ를とㄷ를に違いがある。重刊本はㄷのㄹを母音と見なしていないか、あるいは内破のㄹと外破のㄹを分けて表記しているように思われる。次に、니세と니어の違いである。ㅌがㅇになっている。現代語のㅌ変格活用とおなじ活用をしている。これは前で見えた「ㅌㅌㅌ」から「ㅌㅇㅌ」の変化のㅌ>ㅇと同じ現象

である。つまりΔは前後に母音が来ると脱落するという規則が、初刊本が印刷された1481年から重刊本が出た1632年までにできたことがわかる。ㄹ変格活用はもともと用言語幹末のㄹが、母音ではじまる語尾がつくと、有声音Δに変化したものであるが、1481年以降にΔは前後に母音が来ると脱落するという規則ができ、その結果、現在のㄹ変則活用になったことが分かる。現代語でも이은 집 (隣の家) は、잇+은 (子音につく連体形語尾) + 집で、ㄹに母音ではじまる語尾がついて母音にはさまれた結果ㄹ→Δ→ㄱになっていることが分かる。現代語のㄹ変格活用は1481年から1632年までの間に成立した規則ということになる。

4 春望 (その4) 白頭搔更短、渾欲不勝簪

4-1 白頭搔更短

白頭搔けば更に短く **센 머리를 글구니 또 더르니**

語釈

세다[形](白)(髪が)白い。-ㄴ[連体形語尾]状態を表す。**머리**[名](頭)あたま。**-를**[助詞]~を。**글다**[動](搔)かく。-니[接続語尾]~すると。**또**[副](更、又、亦)さらに、また。その上。**더르다**[形](短)みじかい。-니[接続語尾]~て。

文釈

「白頭搔更短」の書き下し文は「白頭搔けば更に短く」である。諺解は「**센 머리를 글구니 또 더르니**」である。この句を分節すると**세**(白い) + **-ㄴ**(連体形語尾) + **머리**(あたま) + **를**(を) + **글**(搔く) + **-ㄴ**(意図法の語尾で一と交替している) + **니**(接続語尾) + **또**(さらに) + **더르**(短い) + **니**(接続語尾)である。和訳は、「白い頭を搔くとさらに短くて」となる。

解説

1) 連体形語尾-ㄴ

「**센 머리**」のㄴは形容詞の連体形語尾である。「白髪頭」「はげ頭」など頭を下位に類別するために連体修飾が使われる。形容詞の連体形語尾は目で見ただ般的な状態を表す-ㄴ/은/은と、自分の思いやまだ現実でない状態を示す-ㄴ/을/을が

ある。結合の条件は「は」助詞や「を」助詞と同じである。

2) 音の変化

1632年の重刊『杜詩諺解』のこの箇所とも比べてみる。

센 머리를 글구니 또 더르니 (初刊本)

센 머리를 글구니 또 더르니 (重刊本)

変化はない。

4-2 渾欲不勝簪

渾て簪に勝へざらんと欲す 다 빈혀를 이긋디 못할 듯 ㅎ도다

語釈

다[副] (渾、咸) みな。すべて。빈혀[名] (簪) かんざし。-를[助詞] ~を。이긋다[他動] (勝) かつ。たえる。-디[名詞転成語尾] 用言を否定形にするときに語幹につける。못[副] (不) ない。不可能を表す。ㅎ다[動] する。-ㄹ[連体形語尾] 母音の後ろにつく。実現していないことを示す。あるいは後ろの不完全名詞の内容であることを示す。듯[名] (欲) 様子。-도다[終結語尾]。

文釈

「渾欲不勝簪」の書き下し文は「渾て簪に勝へざらんと欲す」である。諺解は「다 빈혀를 이긋디 못할 듯 ㅎ도다」である。この句を分節すると다 (すべて) + 빈혀 (かんざし) + -를 (を) + 이긋 (たえる) + 디 (名詞転成語尾) + 못 (できない) + ㅎ다 (する) + ㄹ (連体形語尾) + -듯 (様子) + ㅎ (する) + 도다 (終結語尾) である。和訳は、「まったくかんざしに耐えられないようだ」となる。

解説

1) -디 못ㅎ-

-디 못ㅎ-は「不勝」の諺解、「~することに堪えない」「~出来ない」である。現代語では-지 못하-となっている。

「이긋디 못할」は「不勝」の諺解で、書き下し文は「勝へざらん」である。이긋다は他動詞で前に述べたように意味は「かつ」である。〈月釋序9オ〉には「勝

은 이길씨라(勝は勝つことだ)」とある。現代語では이기다となっている。디は名詞転成語尾で用言を否定形にするとときに語幹につける。〈月曲22〉には「魔王波旬이 큰 德을 새오스박 앓디 못하야 시름하더니(魔王 波旬が大きな徳を妬み座っておられず憂いでいた)」という文例がある。못は副詞で「莫」ない、不可能を表す。他の例を挙げると〈龍12〉「平生ᄃᆞᆫ 뽏 못 일우시니(平生の志を遂げることがおできにならず)」現代語では못になっている。-디 못하-は、「～することにいたらない」「～出来ない」の意味となる。

2) -ㄹ ㄷ ㅎ-

-ㄹは前出の連体形語尾、ㄷは不完全名詞、様子を表す。-ㄹ ㄷ ㅎ-は「欲」の諺解で、「欲」はここでは「(状況が)いまにもなりそうだ」、未来の意思・状態を推量する字である。-ㄹ ㄷ ㅎ-の意味は「まさにそうなりそうだ」「いまにもなりそうだ」となる。このとき-ㄹが未来の状況、まだ実現していない状況であることを示している。

3) 音の変化

1632年の重刊『分類杜工部詩諺解』のこの箇所とも比べてみる。

다 빈혀를 이그디 못홀 ㄷ ㅎ도다 (初刊本)

다 빈혀를 이그디 못홀 ㄷ ㅎ도다 (重刊本)

初刊本と重刊本には違いがない。現代語との違いは1632年以降の変化のようである。

5 絶句二首(その一)

遲日江山麗 春風花草香

遲日江山麗しく 春風花草香し

긴 히에 ᄃᆞᆫ과 외쾌 빛나니 붉 ㅂᄃᆞᆫ매 곳과 플왜 곳답도다

泥融飛燕子 沙暖睡鴛鴦

泥融けて燕子飛び 沙暖かくして鴛鴦睡る

흘기 노ᄃᆞᆫ 저비 놀오 물애 더우니鴛鴦이 조오놉다

5-1 遅日江山麗

遅日江山麗しく 긴 히에 ㄴ름과 ㅁ쾌 빛나니

語釈

길다[形 | ㄹ] (遅) 長い。-ㄴ[連体形語尾]ㄹと母音終わりの形容詞語幹につく。状態を示す。긴はㄹ語幹にㄴが後続し、ㄹが脱落した形である。길+ㄴで긴となる。히[名] (日) ひ。-에[助詞]「～に」助詞。]の後に付く。ある状態が起きている環境、条件などであることを示す。ㄴ름[名] (河、江) かわ。川。ㅁ쾌[名] (山) やま。山または墓を意味する語で助詞と結合するとㅁが表れる。쾌[助詞]と가。빛나다[動]輝く。麗しい。華やかだ。-니[接続語尾]。

文釈

「遅日江山麗」の書き下し文は「遅日江山麗しく」である。諺解は「긴 히에 ㄴ름과 ㅁ쾌 빛나니」である。この句を分節すると길 (長い) + ㄴ (連体形語尾) + 히 (日) + 에 (に) + ㄴ름 (川) + 과 (と) + ㅁ쾌 (山) + 과 (と) + ㅣ (が) + 빛나 (輝く) + 니 (接続語尾) である。和訳は、「長い日に川と山とが輝く」となる。

5-2 春風花草香

春風 花草香し 봄 ㅁ름매 꽃과 ㅍ래 꽃답도다

語釈

봄[名] (春) はる。ㅁ[助詞]～の。ㅁ름[名] (風) かぜ。-ㅍ[助詞]～に。꽃[名] (花) はな。과[助詞]～と。ㅍ래[名] (草) くさ。왜[助詞]～と가。꽃답다[形 | ㅁ] (香) かぐわしい。-도다[終結語尾]感嘆の終結語尾。

文釈

「春風花草香」の書き下し文は「春風 花草香し」である。諺解は「봄 ㅁ름매 꽃과 ㅍ래 꽃답도다」である。この句を分節すると봄 (春) + ㅁ (の) + ㅁ름 (風) + ㅍ (に) + 꽃 (花) + 과 (と) + ㅍ래 (草) + 과 (と) + ㅣ (が) + 꽃답 (かぐわしい) -도다 (終結語尾) である。和訳は、「春の風に花と草が香しい」となる。

5-3 泥融飛燕子

泥融けて燕子飛び 흘기 노니 저비 날오

語釈

흙[名](泥) だろ。土。흘기는 흙に主格助詞]が結合した形である。녹다[動|自](融) とける。저비[名](燕子) つばめ。날다[動|自|ㄹ](飛) とぶ。오[接統語尾]〜て。文と文を対等につなぐ。ㄹと]の後に付く。-고の異形態。

文釈

「泥融飛燕子」の書き下し文は「泥融けて燕子飛び」である。諺解は「흘기 노니 저비 날오」である。この句を分節すると흙(泥) +](が) + 녹(融ける) + ㆍ니(接統語尾) + 저비(つばめ) + 날(飛ぶ) + 오(接統語尾) である。和訳は、「泥が融けて燕が飛び」となる。

5-4 沙暖睡鴛鴦

沙暖かくして鴛鴦 睡る 모래 더우니 鴛鴦이 조오눓다

語釈

모래[名](沙) すな。덥다[形|ㅂ変](熱) あつい。덥+一니でㅂが우となり우+一で母音が連続したので一が脱落している。鴛鴦[名]おしどり。이[助詞]〜が。조오다[動|ㄹ変](睡) ねむる。-눓다[終結語尾] 詠嘆の語尾で動詞語幹につき、時は現在を表わす。

文釈

「沙暖睡鴛鴦」の書き下し文は「沙暖かくして鴛鴦 睡る」である。諺解は「모래 더우니 鴛鴦이 조오눓다」である。この句を分節すると모래(砂) + 덥(暖かい) + 一니(接統語尾) + 鴛鴦(おしどり) + 이(が) + 조오(眠る) + 눓다(終結語尾) である。和訳は、「砂が暖かくておしどりが眠っている」となる。

重刊本との比較

긴 히에 ㄹ름과 외쾌 빛나니 붉 ㅂㄹ매 곱과 플왜 곱답도다 (初刊本)

긴 히에 ㄹ름과 외쾌 빛나니 붉 ㅂㄹ매 곱과 플왜 곱답도다 (重刊本)

흘기 노ᄃ니 저비 놀오 몰애 더우니 鴛鴦이 조오놀다 (初刊本)

흘기 노ᄃ니 저비 놀오 몰애 더우니 鴛鴦이 조오놀다 (重刊本)

異なるのは조오놀다가조오놀다となっている点である。조올다는現代語では
졸다になっている。조올다>조올다>졸다と変化したと考えられる。

6 絶句二首 (その二)

江碧鳥逾白 山青花欲燃

江碧にして鳥逾>白く 山青くして花燃えんと欲す

ᄃᄃᄃ미 ᄃᄃᄃ니 새 더욱 히오 뵈히 퍼러ᄃ니 곳비치 불 붙ᄃ 듯도다

今春看又過 何日是歸年

今春看>又た過ぐ 何れの日か是れ帰年ならん

웁 보미 본던 쏘 디나가ᄃ니 어느 나리 이 도라갈 히오

(絶句二首 杜初10.17才)

6-1 江碧鳥逾白

江碧にして鳥逾>白く ᄃᄃᄃ미 ᄃᄃᄃ니 새 더욱 히오

語釈

ᄃᄃᄃ[名](河、江)かわ。川。|[助詞]~が。ᄃᄃᄃ다[形](碧)深緑色だ。-니[接
続語尾]~ので。~から。새[名](鳥)とり。더욱[副](逾)いよいよ、ますます。
一段と。히다[形](白)しろい。오[接続語尾]~して。文を並列してつなぐ。

文釈

「江碧鳥逾白」の書き下し文は「江碧にして鳥逾>白く」である。諺解は、
「ᄃᄃᄃ미 ᄃᄃᄃ니 새 더욱 히오」である。この句を分節するとᄃᄃᄃ(川)+| (が)
+ᄃᄃᄃ(緑だ)+니(接続語尾)+새(鳥)+더욱(一層)+히(白い)+오(接
続語尾)である。和訳は「川は緑で鳥はますます白く」となる

6-2 山青花欲燃

山青くして花燃えんと欲す **뫼히 퍼러히니 꽃비치 불 붙는 듯도다**

語釈

뫼ㅎ[名]山。|[助詞]~が。**퍼러히다**[形] (青) 青々としている。-**니**[接続] ~ので、から。**꽃**[名]花。**빛**[名]色。いろ。**불**[名] (火) ひ。**붙다**[動|自|ㄷ-ㅂ] (付) つく。語幹末のㄷは子音の前、ㅂは母音の前で現れる。-**는**[連体形語尾] ~ている。動詞の連体形語尾で、目の前で起こっている状況、動きを表す。-**는 듯하다**[連語] (欲) ~しているようだ。動詞語幹につく。-**도다**[終結語尾]感嘆の気持ちを込めて文を終結させる。

文釈

「山青花欲燃」の書き下し文は「山青くして花燃えんと欲す」である。諺解は、「**뫼히 퍼러히니 꽃비치 불 붙는 듯도다**」である。この句を分節すると**뫼**ㅎ(川)+**ㅣ**(が)+**퍼러히**(深緑だ)+**니**(接続語尾)+**꽃**(花)+**빛**(色)+**ㅣ**(が)+**불**(火)+**붙**(つく)+**는**(連体形語尾)+**듯**(様子)+**도다**(終結語尾)である。和訳は「山が青々としているので花の色が火が燃えているようだ」となる。

6-3 今春看又過

今春看ゝ又た過ぐ **올 보미 본던 또 지나가느니**

語釈

올ㅎ[名]今年。**올**[連語]今年の。**올**ㅎの連体形。***올**ㅎ+入。**봄**[名]春。-[助詞]~が。**보다**[動|他] (看) みる。-**던**[接続語尾] ~したのであるが。~なのに。**또**[副] (又) また。**지나가다**[自動] (過) すぎる、過ぎさる。-**느니**[終結語尾] ~している。目の前で状況や動きが起こっていることを表す。

文釈

「今春看又過」の書き下し文は「今春看ゝ又た過ぐ」である。諺解は、「**올 보미 본던 또 지나가느니**」である。この句を分節すると**올**ㅎ(今年)+**入**(の)+**봄**(春)+**ㅣ**(が)+**보**(見る)+**던**(たのに)+**또**(また)+**지나가**(過ぎて)+**느니**(終

結語尾) である。和訳は「この年の春がみたまま、また過ぎている」となる。

6-4 何日は歸年

何れの日か是れ歸年ならん 어느 나리 이 도라갈 히오

語釈

어느[連体詞 | 疑問](何) いずれの～、どの。날[名](日) ひ。-[助詞]～が。疑問詞を含む疑問文では主格は格助詞で表わす。이[代](是) これ。漢文の訳でつかう。動詞の前の体言を強調する。도라가다[自動](帰) かえる。元に戻る。もどる。-ㄹ[連体形語尾]未来の動作状態であることを示す。母音語幹につく。히[名](年) とし。-오[終結語尾]～か。疑問の終結語尾、疑問詞を含む文の文末につける。-고の異形態。]とㄹの後で使う。

文釈

「何日は歸年」の書き下し文は「何れの日か是れ歸年ならん」である。諺解は、「어느 나리 이 도라갈 히오」である。この句を分節すると어느(どの) + 날(日) +](が) + 이(これ) + 도라가(帰る) + ㄹ(連体形語尾) + 히(年) + 오(終結語尾) である。和訳は「いつの日が帰る年か。」となる。

重刊本との比較

ㄹ미 푸르니 새 더욱 히오 뫼히 퍼러히니 꽃비치 블 븐 닷도다(初刊本)

ㄹ미 푸르니 새 더욱 히오 뫼히 퍼러히니 꽃비치 블 븐 닷도다(重刊本)

웁 보미 본던 쏘 디나가느니 어느 나리 이 도라갈 히오(初刊本)

웁 보미 본던 쏘 디나가느니 어느 나리 이 도라갈 히오(重刊本)

ここでは어느が어느になっている。

7 絶句 (兩箇黃鸝鳴翠柳)

兩箇黃鸝鳴翠柳 一行白鷺上青天

兩箇の黃鸝翠柳に鳴き 一行の白鷺青天に上る

두 낫 곳고리논 프른 버드레셔 올오 혼 쥌 하야로빈 프른 하늘해 오르놉다

窓含西嶺千秋雪 門泊東吳万里船

窓には含む西嶺千秋の雪 門には泊す東吳万里の船

窓은 西嶺엿 즘은 힘 누늘 머깃고 門엔 東吳스 萬里엿 비 브딧도다

(絶句-兩箇黃鸝鳴翠柳 杜初25.20オウ)

7-1 兩箇黃鸝鳴翠柳

兩箇の黃鸝翠柳に鳴き 두 낫 곳고리논 프른 버드레셔 올오

語釈

두[数] (兩) 二の. 둘ㅎ 二の連体形. 낫[名] (箇) ~つ. 個. 곳고리[名] (黃鸝) 鶯. -논[助詞]日本語の「は」に相当する. 陽母音の後ろにつく. 프르다[形] (翠) みどり. 버들[名] (柳) やなぎ. -셔[助詞]日本語の助詞「で」に相当する. 올다[動] (鳴) なく. -오接統語尾-고の異形態.

文釈

「兩箇黃鸝鳴翠柳」の書き下し文は「兩箇の黃鸝翠柳に鳴き」である。諺解は、「두 낫 곳고리논 프른 버드레셔 올오」である。この句を分節すると두 (二の) + 낫 (個) + 곳고리 (鶯) + 논 (は) + 프르 (緑) + ㄴ (連体形語尾) + 버들 (柳) + 셔 (で) + 올 (鳴く) + 고 (接統語尾) である。和訳は「二羽の鶯が緑の柳で鳴いて」となる。

7-2 一行白鷺上青天

一行の白鷺青天に上る 혼 쥌 하야로빈 프른 하늘해 오르놉다

語釈

혼[数] (一) 一の. 혼나ㅎ 一の連体形. 쥌[名] (行) つらなり. 스[助詞]「~」の. 하야로비[名] (白鷺) しらさぎ. -ㄴ[助詞]日本語の「は」に相当する. 母音終りの語につく. 하늘ㅎ[名] (天) そら. -ㅣ[助詞]日本語の「に」に相当する.

陽母音の語につく。오르다[動] (上) のぼる。-놉다[終結語尾]感嘆の気持ちを含む。

文釈

「一行白鷺上青天」の書き下し文は「一行の白鷺青天に上る」である。諺解は、[**한 줄** **하야로빈** **프른** **하늘** **해** **오르** **놉다**]である。この句を分節するとき(一の) + 줄 (列) + **스** (の) + **하야로비** (白鷺) + **ㄴ** (は) + **프르** (青い、緑) + **-ㄴ** (連体形語尾) + **하늘** (空) + **에** (に) + **오르** (上がる) + **놉다** (接続語尾) である。和訳は「一列の白鷺が青い空に上がっている」となる。

7-3 窓含西嶺千秋雪

窓**은** 西嶺**옛** **즈믄** **히** **누** **늘** **머** **것** **고** 窓には含む 西嶺千秋の雪

語釈

窓[名]まど。은[助詞][～は]陽母音を含む、子音終わりの語につく。西嶺[名]チベット高原の東縁の山々。옛[助詞]～で。場所、場面を表す。즈믄[数]千。히[名]年。스[助詞][～の]。눈[名]雪。늘[助詞]日本語の「～を」に相当する。陰母音を含む、母音終わりの語につく。머다[他動]含む。抱く。ㄴ[補助語幹]完了を表わす。고[接続語尾]文と文をつなぐ。

文釈

「窓含西嶺千秋雪」の書き下し文は「窓には含む 西嶺千秋の雪」で、諺解は「**窓은** **西嶺** **옛** **즈믄** **히** **누** **늘** **머** **것** **고**」である。この句を語釈を参考に分節すると、窓(窓) + 은(は) + 西嶺(チベット高原の東端の山々) + 옛(にある) + **즈믄**(千) + **히**(年) + **스**(の) + **눈**(雪) + **늘**(を) + **머**(抱く) + **ㄴ**(完了の語尾) + **고**(接続語尾) である。和訳は、「窓はチベット高原の東端の山々の万年雪を抱き」となる。

7-4 門泊東吳万里船

門**엔** 東吳**入** 萬里**옛** **비** **브** **텃** **도** **다** 門には泊す 東吳万里の船

語釈

門[名]出入口。ドア。엔[助詞][～には]場所を表す。에に+ㄴは。東吳[地名]揚子江の下流地域。ㅅ[助詞][～の]。萬里[名]万里の彼方。옛[助詞][～からの]。[i]の後につく。비[名](船)ふね。붙다[自動]付く。接する。ㄹ[補助語幹]完了を表わす。도다[終結語尾]感嘆の気持ちを含む。

文釈

「門泊東吳万里船」の書き下し文は「門には泊す 東吳万里の船」である。諺解は「門엔 東吳ㅅ 萬里옛 비 브딧도다」である。この句を分節すると門(門のまえ) + ㅁ (に) + ㄴ (は) + 東吳(揚子江の下流地域) + 萬里(遠い所) + 옛(からの) + 비(船) + 붙(着く) ㄹ(完了の語尾) + 도다(終結語尾)である。和訳は、「門の前には揚子江下流地域の船が着いている」となる。

重刊本との比較

두 낫 곳고리눈 프른 버드레셔 올오 혼 쥌 하야로빈 프른 하늘해 오르눗다
(初刊本)

두 낫 곳고리눈 프른 버드레셔 올고 혼 쥌 하야로빈 프른 하늘해 오르눗다
(重刊本)

窓은 西嶺에 즘은 힘 누늘 머것고 문엔 東吳ㅅ 萬里옛 비 브딧도다 (初刊本)

窓은 西嶺에 즘은 힘 누늘 머것고 문엔 東吳ㅅ 萬里옛 비 브딧도다 (重刊本)

에が옛になっている。

8 春夜喜雨

好雨知時節 當春乃發生

好雨時節を知り 春に当りて乃ち發生す

도흔 비時節을 아니 보물當히야 베퍼 나게 흐눗다

隨風潛入夜 潤物細無聲

風に隨いて潜かに夜に入り 物を潤して細やかに声無し

북극물 조차 ㄱ마니 바미 드느니 物을 저저 ㄱ느라 소리 업도다

野徑雲俱黑 江船火獨明

野徑雲俱に黒く 江船火獨り明るし

미햇 길헨 구루미 다 어듭고 ㄱ흠 비엔 브리 ㅎ오사 붉도다

曉看紅濕處 花重錦官城

曉に紅の湿う處を看れば 花は重からん錦官城

새배 블근 저즌 싸흘 보니 錦官城에 고지 해 펫도다

8-1 好雨知時節

도흔 비時節을 아니 好雨時節を知り

語釈

도흔다[形] (好) よい。-ㄴ[連体形語尾]形容詞母音終わり語幹について状態を表す。비[名] (雨) あめ。時節[名]時期、機会。-을[助詞]「~を」、陰母音からなる音節が子音で終わるとその後につく。알다[他動 | ㄷ]知る、分かる。-니[接統語尾]~て。

文釈

最初の句「好雨知時節」の書き下し文は「好雨時節を知り」である。諺解は「도흔 비時節을 아니」である。この句を分節すると도흔(良い) + ㄴ(連体形語尾) + 비(雨) + 時節(時機) + 을(を) + 알(知る: ㄷ変) + -니(終結語尾)である。和訳は、「良い雨は時期を知り」となる。

8-2 當春乃發生

보달 當ㅎ야 베퍼 나게 ㅎ낫다 春に当りて乃ち發生す

語釈

봄[名]春。-ㄴ[助詞]「~を」。陽母音の閉音節につく。當ㅎ다[他動]あたる。ある時間、空間、状況に直面する。日本語と格支配が異なる。-야[接統語尾]~すると。条件を表す。베프다[他動]施す。恵む。나다[他動]でる。-게 ㅎ다[連

語] ~させる。

文釈

「當春乃發生」の書き下し文は「春に当たりて乃ち發生す」である。諺解は「보물 當^ㅎ야 베퍼 나게 ^ㅎ늦다」である。この句を分節すると봄(春) + 을(を) + 當^ㅎ (当たる) + 야(連用形語尾) + 베퍼(施す) + ㅓ(連用形語尾) + 나(でる) + 게^ㅎ (させる) + 늦다(終結語尾)である。和訳は、「春に当たって施こさせる」となる。

8-3 隨風潛入夜

बर물 조차 ㅗ마니 바미 드느니 風に隨いて潜かに夜に入り

語釈

बर[名](風) かぜ。-을[助詞][~を]。좃다[他動](隨) したがう。ㅗ마니[副](潜) ひそかに。밤[名]夜。-,][助詞][~に]。陽母音の閉音節につく。들다[自動](入) はいる。-느니[終結語尾]~している。動詞に付いて、動作が目の前で起こっていることを示す。

文釈

「隨風潛入夜」の書き下し文は「風に隨いて潜かに夜に入り」である。諺解は「बर물 조차 ㅗ마니 바미 드느니」である。この句を分節するとबर(風) + 을(を) + 좃(したがう) + ㅓ(連用形語尾) + ㅗ마니(ひそかに、そっと) + 밤(夜) + ,][に] + 들(入る) + 느니(終結語尾：現在)である。和訳は、「風に隨ひて潜かに夜に入る」となる。

8-4 潤物細無聲

물을 저저 ㅗ느라 소리 업도다 物を潤して細やかに声無し

語釈

物[名]万物。-을[助詞]~を。陰母音の閉音節につく。저지다[他動](潤) うるおす。-ㅓ / ㅓ[連用形語尾]~。-ㅓは陽母音音節の後ろ、ㅓは陰母音音節の後

ろにつく。ㄹ닐다[形] (細) 細やかだ。소리[名] (声) おと。업다[形] (無) ない。-도다[終結語尾]。

文釈

「潤物細無聲」の書き下し文は「物を潤して細やかに声無し」である。諺解は「물을 저저 ㄹ닐라 소리 업도다」である。この句を分節すると物 (万物) + 을 (を) + 저저 (潤す) + ㅣ (連用形語尾) + ㄹ닐 (細やかだ) + ㅣ (連用形語尾) + 소리 (音) + 업 (ない) + 도다 (終結語尾) である。和訳は、「万物を潤し細やかで音がない」となる。

8-5 野徑雲俱黑

미햇 길헛 구루미 다 어듭고 野徑雲俱に黒く

語釈

미햇[名] (野) 山。-ㄹ[動]にある。길헛[名] (徑) 道。-헛[助詞]には。구름[名] (雲) くも。-ㅣ[助詞]~が。다[副] (俱) みな。어듭다[形] (黒) くらい。くろい。-고[接統語尾]。

文釈

「野徑雲俱黒」の書き下し文は「野徑雲俱に黒く」である。諺解は「미햇 길헛 구루미 다 어듭고」である。この句を分節すると미햇 (山) + ㄹ (にある) + 길헛 (道) + 헛 (に) + 헛 (は) + 구름 (雲) + ㅣ (が) + 다 (みな) + 어듭 (黒い) + 고 (接統語尾) である。和訳は、「山の道にある雲がみな暗く」となる。

8-6 江船火獨明

ㄹ름 비엔 브리 헛오샤 밝도다 江船火独り明るし

語釈

ㄹ름[名] (江) 川。스[助詞]~の。비[名] (船) ふね。엔[助詞]~には。블[名] (火) ひ。-ㅣ[助詞]~が헛오샤[副] (獨) 独り。밝다[形] (明) あかるい。-도다[終

結語尾]。

文釈

「江船火獨明」の書き下し文は「江船火独り明るし」である。諺解は「**마름 비엔 브리 호오사 붉도다**」である。この句を分節すると**마름**(川) + **스**(の) + **비**(舟) + **에**(に) + **니**(は) + **불**(火) + **이**(が) + **호오사**(独り) + **붉**(明るい) + **도다**(終結語尾)である。和訳は、「川の舟では火だけが明るい」となる。

8-7 曉看紅濕處

새매 붉근 저즌 짜흠 보니

曉に紅の湿う処を看れば

語釈

새매[名](曉)夜明け。**붉다**[形](紅)赤。**-ㄴ**[連体形語尾]状態を示す。**젖다**[動]濡れる。**-ㄴ**[連体形語尾]完了を示す。**짜흠**[名](処)ところ。地。**-ㄴ**[助詞]~を。**보다**[他動](看)みる。**-니**[接続語尾]~すると。

文釈

「曉看紅濕處」の書き下し文は「曉に紅の湿う処を看れば」である。諺解は「**새매 붉근 저즌 짜흠 보니**」である。この句を分節すると**새매**(夜明け) + **붉**(赤い) + **ㄴ**(連体形語尾:状態) + **젖**(濡れる) + **ㄴ**(連体形語尾:状態) + **짜흠**(地) + **을**(を) + **보**(見る) + **니**(接続語尾)である。和訳は、「夜明けに赤く湿ふ地面を看ると」となる。

8-8 花重錦官城

錦官城 에 고지 해 꿏도다 花は重からん錦官城

語釈

錦官城[地名]成都の西城。**에**[助詞]~に。**꽃**[名](花)はな。**-이**[助詞]~が。**해**[副]多く。**꿏다**[自動]重なる。**-이**[連用形語尾]。**-ㄴ**[動]いる。

文釈

「花重錦官城」の書き下し文は「花は重からん錦官城」である。諺解は「錦官城에 고지 해 뻗도다」である。この句を分節すると錦官城（成都の西城）+에（に）+ 꽃（花）+ |（が）+ 해（いっぱい）+ 께（重なる）+ |（て：連用形語尾）+ |（いる）+ 도다（終結語尾）である。和訳は、「錦官城に花がいっぱい重なっている」となる。

重刊本との比較

도흔 비時節을 아니 보물 當^ㅎ야 베퍼 나게 ^ㅎ놋다 (初刊本)

도흔 비時節을 아니 보물 當^ㅎ야 베퍼 나게 ^ㅎ놋다 (重刊本)

부르물 조차 마니 바미 드느니 物을 저저 마느라 소리 업도다 (初刊本)

부르물 조차 마니 바미 드느니 物을 저저 마느라 소리 업도다 (重刊本)

미햇 길헨 구루미 다 어듭고 궤 비엔 브리 ^ㅎ오사 ^ㅎ도다 (初刊本)

미해 길헨 구루미 다 어듭고 궤 비엔 브리 ^ㅎ오아 ^ㅎ도다 (重刊本)

새배 불근 저즌 짜홀 보니 錦官城에 고지 해 뻗도다 (初刊本)

새배 불근 저즌 짜홀 보니 錦官城에 고지 해 뻗도다 (重刊本)

궤 > 궤 사이ソリの消失、^ㅎ오사 > ^ㅎ오아 Δの消失などがみられる

9 夜

露下天高秋水清 空山獨夜旅魂驚

露下り天高くして秋水清し 空山独夜旅魂驚く。

이스리 노뽀 하늘해셔 느리고 궤 므리 몰마니 뷔 밧 ^ㅎ오사 바미 나그내
녁슬 놀라노라

疎燈自照孤帆宿 新月猶懸雙杵鳴

疏燈自ら照らして孤帆宿り 新月猶お懸りて双杵鳴る

드문 불비춘 외꺾원 비에서 자물 제 비취엿고 새 드른 두 방해 우는 디
오히려 들엿 도다

南菊再逢人臥病 北書不至鴈無情

南菊再び逢いて人病に臥し 北書至らず雁情 無し

南 녀 菊花 를 다시 만나니 사르미 病 ㅎ야 누엇노니 北 녀 音書 | 오디
아니 ㅎ니 그려 기 ㅸ디 업도다

步蟾倚杖看牛斗 銀漢遙應接鳳城

步蟾杖に倚りて牛斗を看れば 銀漢遙に応に鳳城に接するべし

躡비제 건너 막다히를 비겨서 牛斗星을 보니 銀漢이 아스라히 당당이 鳳
城에 니셋거

(夜 杜初11.48ウ)

9-1 露下天高秋水清

이스리 노푼 하늘해서 ㄴ리고 ㄹ숯 ㄹ리 물 ㄹ니 露下り天高くして秋水清し
語釈

이슬[名] (露) つゆ。-|[助詞]~가. 높다[形]高い。-ㅸ[連体形語尾]状態。
하늘ㅎ[名] (天) そら。-ㅸ서[助詞]~から. ㄴ리다[動] (下) おりる。-고 [接
統語尾]。ㄹ술[名] (秋) あき。ㅸ[助詞]~の. 물[名] (水) みず. ㅸ다[形] (清)
きよい。-ㅸ니[終結語尾]。

文釈

「露下天高秋水清」の書き下し文は「露下り天高くして秋水清し」である。諺
解は「이스리 노푼 하늘해서 ㄴ리고 ㄹ숯 ㄹ리 물 ㄹ니」である。この句を
分節すると이슬 (露) + | (가: 助詞) + 높 (高い) + ㅸ (連体形語尾: 状態)
+ 하늘ㅎ (天) + ㅸ서 (から) + ㄴ리 (下りる) + 고 (接統語尾) + ㄹ술 (秋)
+ ㅸ (の) + 물 (水) + | (가: 格助詞) + ㅸ (清し) + ㅸ니 (終結語尾) である。
和訳は「露が高い天から下り秋の水が清い」となる。

9-2 空山獨夜旅魂驚

빈 밋 히오사 바미 나그네 녀슬 놀라노라 空山獨夜旅魂驚く

語釈

빈다[形] (空) からだ。-ㄴ[連体形語尾]状態 뫼ㅎ[名] (山) やま。스[助詞] ~の。히오사[副] 独り。밤[名] (夜) よる。-, [助詞] ~に。나그네[名] (旅) 旅人。녀[名] (魂) たましい。-을[助詞] ~を。놀라다[動] (驚) おどろかす。-노라[終結語尾]。

文釈

「空山獨夜旅魂驚」の書き下し文は「空山 獨夜 旅魂驚く」である。諺解は「빈 밋 히오사 바미 나그네 녀슬 놀라노라」である。この句を分節すると빈(空; から) + ㄴ(連体形語尾: 状態) + 뫼ㅎ(山) + 스(の) + 히오사(独り) + 밤(夜) + , ([に]) + 나그네(旅人) + 녀(魂) + 을(を) + 놀라(驚かす) + 노라(終結語尾) である。和訳は、「人気の無い山の独りの夜の夜に旅人の心を驚かす」となる。

9-3 疎燈自照孤帆宿

드른 불비춘 외르윈 비에서 자물 제 비취엿고 疎燈自ら照らして孤帆宿り

語釈

드믈다[形] (疎) 希だ、疎らだ。불[名] (火) ひ。스[助詞] ~の。빛[名] (光) ひかり。-ㄴ[助詞] ~は외롭다[形: ㄷ変] (孤) 孤立している。비[名] (帆) ふね。-에서[助詞] ~で。잠[名] (宿) 眠ること。泊まること。-을[助詞] ~を。제[副] (自) 自ずから。비취다[動] 照らす。여[連用形語尾] ~て。있다[動] いる。-고[接続語尾]。

文釈

「疎燈自照孤帆宿」の書き下し文は「疎燈自ら照らして孤帆宿り」である。諺解は「드른 불비춘 외르윈 비에서 자물 제 비취엿고」である。この句を分節すると드믈(疎ら) + ㄴ(連体形語尾: 状態) + 불(火) + 스(の) + 빛(光) + ㄴ(は) + 외롭(孤立した) + ㄴ(連体形語尾) + 비(舟) + 에서(で) + 줌(泊

まること) + 을 (を) + 제 (自ずから) + 비취 (照らす) + 여 (て：連用形語尾) + ㅓ (いる) + 고 (接続語尾) である。和訳は、「疎らな灯火は一艘の舟で眠るものを照らしていて」となる。

9-4 新月猶懸雙杵鳴

새 든 두 방해 우는 디 오히려 들었도다 新月猶お懸りて双杵鳴る

語釈

새[連体詞]新しい。들[名](月)つき。-ㄴ[助詞]～は。두[数]二つの。방하[名]砧。울다[動詞](鳴)響く。鳴る。-는[連体形語尾] 現在進行。디[名]とところに。오히려[副]却って。들이다[動] 懸かる。-ㅓ-[補助語幹]過去形をつくる。-도다[終結語尾]。

文釈

「新月猶懸雙杵鳴」の書き下し文は「新月 猶お懸りて双杵鳴る」である。諺解は「새 든 두 방해 우는 디 오히려 들었도다」である。この句を分節すると새(新しい) + 들(月) + 는(は) + 두(二つの) + 방해(砧) + 을(響く) + 는(連体形語尾：現在進行) + 디(ところに) + 오히려(却って) + 들이(懸かる) + ㅓ(過去形) + 도다(終結語尾) である。和訳は、「新月は二つの砧が響いているところに却って懸かっている」となる。

9-5 南菊再逢人臥病

南녘菊花를 다시 만나니 사름이 병하야 누엇노니 南菊再び逢いて人病に臥し

語釈

南녘[名](南)みなみ。ㅓ[助詞]～の。菊花[名](菊)菊の花。-를[助詞]～を。다시[副](再)ふたたび。만나다[動](逢)あう。-니[接続語尾]。사름[名](人)ひと。-[助詞]～が。병하다[動](病)やむ。눕다[動]：ㅁ變]臥す。-엇-[補助語幹]完了を示す。-노니[終結語尾]現在の時制で、その動作が個々人のこと

であるとする。

文釈

「南菊再逢人臥病」の書き下し文は「南菊再び逢いて人病に臥し」である。諺解は「南녓 菊花를 다시 만나니 사름이 병키야 노었니」である。この句を分節すると南녓(南) + 스(の) + 菊花(菊の花) + 를(を) + 다시(再び) + 만나(逢う) + 니(接続語尾) + 사름(人) + 이(が) + 병키(病気になる) + 누(臥せる) + ㅏ(過去の語尾) + 노니(終結語尾)である。和訳は、「南方の菊の花に再び逢い、人が病になり臥せている」となる。

9-6 北書不至鴈無情

北녓 音書ㅣ 오디 아니키니 그려기 ㅅ디 업도다 北書至らず雁情無し

語釈

北녓[名](北)きた。音書[名](書)便り。오디[動](至)いたる。- 디 아니키-[連語]否定を表す。- 니[接続語尾]。그려기[名]雁。ㅅ[名](情)なさげ。ㅣ[助詞]~が。업다[形](無)ない。

文釈

「北書不至鴈無情」の書き下し文は「北書至らず雁情無し」である。諺解は「北녓 音書ㅣ 오디 아니키니 그려기 ㅅ디 업도다」である。この句を分節すると北녓(北方) + 音書(便り) + ㅣ(が) + 오(来る) + 디 아니키(否定の表現) + 니(接続語尾) + 그려기(雁) + ㅅ(情け) + ㅣ(が) + 업(ない) + 도다(終結語尾)である。和訳は、「北方の便りは来ず雁は情けというものがない」となる。

9-7 步蟾倚杖看牛斗

뽰비체 건너 막다히를 비겨서 牛斗星을 보니

步蟾杖に倚りて牛斗を看れば

語釈

뽰비체[名](步蟾)渡り廊下。건니다[動]歩く。- ㅣ-[連用形語尾]。막다히[名]

(杖) つえ。-를[助詞]～を。비기다[動]寄りかかる。-ㅅ서[接続語尾]完了を表す。牛斗星[名]牽牛と北斗星。-을[助詞]～を。보다[動]見る。-니[接続語尾]。なお뽕비제는漢文と対照すると、뽕비제=步蟾「渡り廊下」となるが、諺解の解釈では달(月)+스(の)+빛(光)+ㅁ(に)と考えられる。ここでは後者をとる。

文釈

「步蟾倚杖看牛斗」の書き下し文は「步蟾 杖に倚り牛斗を見る」である。諺解は「뽕비제 건너 막다히를 비겨서 牛斗星을 보니」である。この句を分節すると달(月)+스(の)+빛(光)+ㅁ(に)+건너(歩く)+ㅅ(て:連用形語尾)+막다히(杖)+를(を)+비기(寄りかかる)+ㅅ서(～して)+牛斗星(牽牛と北斗星)+을(を)+보(見る)+니(終結語尾)である。和訳は、「月の光に歩いて杖に寄りかかり牽牛と北斗星を見る」となる。

9-8 銀漢遙應接鳳城

銀漢이 아스라히 당당이 鳳城에 니셋거니라 銀漢遙に応に鳳城に接するべし

語釈

銀漢[名](銀河)ぎんが。이[助詞]～が。아스라히[副]遠く、遥かに。당당이[副]当然に。鳳城[名]長安。뵈다[動詞]続く、接する-ㅅ-[連用形語尾]。-있다[動詞]いる。거니라[終結語尾]～なのである。

文釈

「銀漢遙應接鳳城」の書き下し文は「銀漢遙に応に鳳城に接するべし」である。諺解は「銀漢이 아스라히 당당이 鳳城에 니셋거니라」である。この句を分節すると銀漢(銀河)+이(が)+아스라히(遥かに)+당당이(当然に)+鳳城(長安)+에(に)+뵈(接する)+ㅅ(て:連用形語尾)+있다(いる)+거니라(終結語尾:なのである)である。和訳は、「銀河が遥かに当然に長安に接しているのである」となる。

重刊本との比較

이스리 노꾼 하늘해서 느리고 꺄숄 므리 몰꺄니 뵤 뵤 호오사 바미 나그내
녁슬 놀라노라 (初刊本)

이스리 느리고 하늘히 놉고 꺄올 므리 몰꺄니 뵤 뵤 호오아 바미 나그내
녁슬 놀라노라 (重刊本)

드른 블비춘 외르윈 비에서 자물 제 비취엿고 새 드른 두 방해 우는 디
오히려 들엿도다 (初刊本)

드른 블비춘 외르윈 비에서 자물 제 비취엿고 새 드른 두 방해 우는 디
오히려 들엿도다 (重刊本)

南녓 菊花를 다시 맛나니 사르미 病하야 누엇노니 北녓 音書 | 오디 아니하니
그러기 쁘디 엽도다 (初刊本)

南녓 菊花를 다시 맛나니 사르미 病하야 누엇노니 北녓 音書 | 오디 아니하니
그러기 쁘디 엽도다 (重刊本)

둘비체 건너 막다히를 비겨서 牛斗星을 보니 銀漢이 아스라히 당당이 鳳
城에 니셋거니라 (初刊本)

둘비체 거라 막다히를 비겨서 牛斗星을 보니 銀漢이 아스라히 당당이 鳳
城에 니셋거니라 (重刊本)

語順が違ふもの。노꾼 하늘해서 느리고 > 느리고 하늘히 놉고。△の消失
꺄숄 > 꺄올, 호오사 > 호오아, 아스라히 > 아스라히, 니셋거니라 > 니셋거니라。助
詞入の消失 꺄숄 > 꺄올, 블비춘 > 블비춘, 南녓 > 南녓, 둘비체 > 둘비체。第2音節の
、 > 一 몰꺄니 > 몰꺄니, 바미 > 바미などの變化がみられる。

10 冬至

年年至日長爲客 忽忽窮愁泥殺人

年年の至日長に客と為り 忽忽として窮愁人を泥殺す

히마다 冬至스나래 기리 나그내 ㄷ외요니 忽忽히 기픈 시르미 사르미 ㅁ
ㅁ 물 굶누르는다

江上形容吾獨老 天涯風俗自相親

江上の形容吾れ独り老い 天涯の風俗自ら相い親む

ㄹ흠 우훗 열구른 내 ㅎ을로 늘구니 하늘 ㄹㅅㅅ 風俗을 내 서르 親호라

杖藜雪後臨丹壑 鳴玉朝來散紫宸

藜を杖きて雪後丹壑に臨み 玉を鳴らして朝来る紫宸に散ず

도트랏 막대 ㄷㅅ고 눈 온 後에 ㄹ근 ㅅㅅ고를 디러슈니 佩玉을 ㄹ여 아츰
오매 紫宸殿에서 흐리 가느니라

心折此時無一寸 路迷何處見三秦

心折れて此の時一寸も無し 路迷いて何れの処か三秦を見ん

ㅁㅁㅁㅁ ㅅㅅ거더 이ㅅㅅ ㅎ ㅅ도 업스니 길ㅎ 迷ㅅ키니 어느 ㅅㅅ해 三秦을 보리오

(冬至 杜初11.36才)

10-1 年年至日長爲客

히마다 冬至스나래 기리 나그내 ㄷ외요니 年年の至日長に客と為り

語釈

히[名](年)とし。-마다[助詞]ごとに。冬至[名]とうじ。스[助詞]~の。날[名]
(日)ひ。-ㅅ[助詞]~に。기리[副]長い間。나그내[名]旅人。ㄷ외다[自動]なる。
-요니[終結語尾]事実が個別の出来事であることを示す。

文釈

「年年至日長爲客」の書き下し文は「年年の至日長に客と為り」である。諺解は「히마다 冬至스나래 기리 나그내 ㄷ외요니」である。この句を分節すると 히(年) + 마다(ごと) + 冬至(冬至) + 스(の) + 날(日) + ㅅ(に) + 기리(長い間) + 나그내(旅人) + ㄷ외(なり) + 요(意図法：自分の出来事であることを示す) + 니(接続語尾)である。和訳は、「(私は) 毎年冬至の日には長く旅人

となり」となる。

10-2 忽忽窮愁泥殺人

忽忽히 기쁜 시름이 사름이 마음물 굶누르나다 忽忽として窮愁人を泥殺す
語釈

忽忽히[副] (忽忽) 不安に。깊다[形]深い。-ㄷ[連体形語尾]状態を示す。
시름[名] (愁) うれい。사름[名] (人) ひと。-, [助詞] ~の。마음[名] (心) こ
ころ。-ㄹ[助詞] ~を。굶누르다[他動] 圧迫する、押さえつける。-나다[終結語
尾] 現在を示す。

文釈

「忽忽窮愁泥殺人」の書き下し文は「忽忽として窮愁人を泥殺す」である。諺
解は「忽忽히 기쁜 시름이 사름이 마음물 굶누르나다」である。この句を分
節すると忽忽히 (不安で) + 깊 (深い) + ㄷ (連体形語尾: 状態) + 시름 (愁い)
+ ㅣ (が) + 사름 (人) + , (の) + 마음 (心) + ㄹ (を) + 굶누르 (押さえつける)
+ 나다 (現在の終結語尾) である。和訳は、「不安で深い憂いが人の心を押さえ
つける」となる。

10-3 江上形容吾獨老

ㄹ름 우뿔 얼구른 내 홀로 늙구니 江上の形容吾れ独り老い

語釈

ㄹ름[名] (江) かわ。스[助詞] ~の。우뿔[名] (上) うえ。ㄷ[動] にある。얼굴[名]
(形) 姿。-ㄷ[助詞] ~は。내[代] (吾) 나「わたし」の主格形。홀로[副] (獨)
独り。늙다[動] (老) 老いる。ㄱ (意図法: 個々の事柄であることを示す) + 니
[接続語尾]

文釈

最初の句「江上形容吾獨老」の書き下し文は「江上の形容吾れ独り老い」である。
諺解は「ㄹ름 우뿔 얼구른 내 홀로 늙구니」である。この句を分節するとㄹ름

(川) +ㅅ (の) +우ㅎ (上) +ㄴ (にある) +얼굴 (姿) +ㄴ (は) +내 (私が) +ㅎ올로 (独り) +늙 (老い) +ㄱ (意図法) +니 (接続語尾) である。和訳は、「川の上にある私の姿は独り老いて」となる。

10-4 天涯風俗自相親

하늘 ㅁㅅ 風俗을 내 서르 親호라 天涯の風俗自ら相い親む

語釈

하늘ㅎ[名](空)天。ㅅ[助詞]~の。ㅁ[名](涯)はて。ㄴ[動]にある。風俗[名]しきたり、習わし。-을[助詞]~を。내[代](自)自分が。서르[副](相)互いに。親ㅎ다[動](親)親しむ。-ㄴ라 (意図法、現在の終結語尾)。

文釈

「天涯風俗自相親」の書き下し文は「天涯の風俗自ら相い親む」である。諺解は「하늘 ㅁㅅ 風俗을 내 서르 親호라」である。この句を分節すると하늘ㅎ(空) +ㅅ(の) +ㅁ(はて) +ㄴ(にある) +風俗(習わし) +을(を) +내(自分が) +서르(互いに) +親ㅎ(親しむ) +ㄴ(意図法) +라(現在の終結語尾) である。和訳は、「空のはての地の習わしは自分たちが親しむのである」となる。

10-5 杖藜雪後臨丹壑

도ㅌ랏 막대 답고 눈 온 後에 불근 밧고를 디러슈니 藜を杖きて雪後丹壑に臨み

語釈

도ㅌ랏[名](藜)あかざ。막대[名](杖)つえ。답다[他動](杖を)つく。-고[接続語尾]。밧골[名](壑)溪谷。디르다[動](臨)のぞむ。시다[動]いる。ㄱ[意図法の語尾]。-니[接続語尾]。

文釈

「杖藜雪後臨丹壑」の書き下し文は「藜を杖きて雪後丹壑に臨み」である。諺解は「도ㅌ랏 막대 답고 눈 온 後에 불근 밧고를 디러슈니」である。この句

を分節すると도(あかざ) + 막대(杖) + 딛(つく) + 고(接続語尾) + 눈(雪) + 오(来る) + ㄴ(連体形語尾:完了) + 後(のち) + 에(に) + 붉(赤い) + ㄴ(連体形語尾:状態) + 밧골(溪谷) + 을(を) + 디르(臨む) + ㅓ(連用形語尾) + 시(いる) + ㅓ(意図法) + 니(接続語尾) である。和訳は、「藜の杖をついて雪が降った後に紅葉の溪谷に臨んでいる」となる。

10-6 鳴玉朝來散紫宸

佩玉을 울여 아츰 오매 紫宸殿에서 흐러 가느니라 玉を鳴らして朝来る紫宸に散ず

語釈

佩玉[名]裝飾の玉。-을[助詞]~を。울이다[他動]鳴らす。-어-[連用形語尾]~て。아츰[名](朝)あさ。오다[動](来)くる。-로[名詞転成語尾]こと。-ㅓ[助詞]~に。紫宸殿[名]長安の宮殿。-에서[助詞]~から。흐르다[動](散)流れる。-어-[連用形語尾]~て。가다[動](行)いく。-는[連体形語尾]進行を表す。|[不完全名詞]の。-ㅣ라[終止語尾]。

文釈

「鳴玉朝來散紫宸」の書き下し文は「玉を鳴らして朝来る紫宸に散ず」である。諺解は「佩玉을 울여 아츰 오매 紫宸殿에서 흐러 가느니라」である。この句を分節すると佩玉(裝飾) + 을(を) + 울이(鳴らす) + ㅓ(連用形語尾) + 아츰(朝) + 오(来る) + 로(名詞転成語尾) + ㅓ(に) + 紫宸殿(宮殿) + 에서(から) + 흐르(流れ) + ㅓ(連用形語尾) + 가(行く) + 는(連体形語尾:進行) + ㅣ(の:不完全名詞) + ㅣ라(終止形) である。和訳は、「裝飾を鳴らして朝くるに宮殿から流れてゆくのである」となる。

10-7 心折此時無一寸

心折れて此の時一寸も無し ㅁ슴미 깃거더 이뵻 寸도 업스니

語釈

마슴[名] (心) ころ。-[助詞]〜が。것거디다[自動]折れる。-어-[連用形語尾]。이[連体] (此) この。ㅁ[名] (時) とき。-[助詞]〜に。한[数] (一) 一の連体形。寸[名]寸。-도[助詞]〜も。없다[形] (無) ない。-니[接統語尾]。

文釈

「心折此時無一寸」の書き下し文は「心折れて此の時一寸も無し」である。諺解は「마슴이 것거디 이ㅁ 한寸도 업스니」である。この句を分節すると마슴(心) + ㅣ(が) + 것거디(折れ) + ㅣ(連用形語尾) + 이(この) + ㅁ(時) + ㅣ(に) + 한(一つの) + 寸(寸) + 도(も) + 없(ない) + 니(接統語尾) である。和訳は、「心が折れてこのとき一寸もなく」となる。

10-8 路迷何處見三秦

路迷いて何れの処か三秦を見ん 길ஹ 迷失커니 어느 ㅍ해 三秦을 보리오

語釈

길ஹ[名] (道) みち -을[助詞]〜を。迷失커다[動] (道に) 迷う。-거[事実が確定していることを示す接辞]。-니[接統語尾]〜ので。어느[連体] (何) どの。ㅍ해[名] (處) ところ。三秦[名]長安の別名。-을[助詞]〜を。보다[動] (見) みる。-리오[終結語尾]だろうか。

文釈

「路迷何處見三秦」の書き下し文は「路迷いて何れの処か三秦を見ん」である。諺解は「길ஹ 迷失커니 어느 ㅍ해 三秦을 보리오」である。この句を分節すると길ஹ(道) + 을(を) + 迷失커(迷い) + 거(事実が確定していることを示す接辞) + 니(接統語尾) + 어느(どの) + ㅍ해(地) + ㅁ(に) + 三秦(長安) + 을(を) + 보(みる) + 리오(終結語尾：だろうか) である。和訳は、「道に迷ってしまいどこに長安を見るだろうか」となる。

重刊本との比較

히마다 冬至스나래 기리 나그네 ㅍ외요니 忽忽히 기픈 시르미 사러미 막스물
긋누르느다 (初刊本)

히마다 冬至스나래 기리 나그내 드외요니 忽忽히 기픈 시르미 사르미 므으를
긋누르는다 (重刊本)

긋 우 히 얼구른 내 하올로 늘구니 하 긋 잇 風俗을 내 서르 親호라 (初刊本)

긋 롬 우 히 얼구른 내 하올로 늘구니 하 늘 긋 잇 風俗을 내 서르 親호라 (重刊本)

도트랏 막대 딛고 눈 온 후에 블근 밧고를 디러슈니 佩玉을 올여 아츰
오매 紫宸殿 에서 흐러 가느니라 (初刊本)

도트랏 막대 딛고 눈 온 후에 블근 밧고를 디러슈니 佩玉을 올여 아츰 오매
紫宸殿에서 흐터 가느니라 (重刊本)

므 스 미 긋 거더 이~~뵈~~ 흔 寸도 업스니 길 힐 迷失 커니 어느 짜해 三秦을
보리오 (初刊本)

므 으 미 긋 거더 이~~뵈~~ 흔 寸도 업스니 길 힐 迷失 커니 어느 짜해 三秦을
보리오 (重刊本)

△の消失 므 스 물 > 므 으 물、긋 잇 > 긋 롬、므 스 미 > 므 으 미。・>一の變化
므 스 물 > 므 으 물。△の消失 긋 롬 > 긋 롬、하 늘 > 하 늘。文字の相違 후에 > 후에、
흐러 > 흐터。흐러は「流れて」、흐터は「散じて」などの違いがみられる。

おわりに

これで1学期分の教材であるが、この後、学生に課題として文法形態を中心に
内容を整理したものを提出させ、評価している。次の学期は最初の5回は文法を
やや詳しく概観し、残りの10回は影印本を使い、日本語の書き下し文がある文献

を教材に取り上げ、読解をさせる。例えば『法華経諺解』、『阿弥陀経諺解』などである。これらには経典の本文だけでなく、註解の諺解も含まれるが、まずは本文だけを読む。1年を終えた段階で、漢文を見ながら註解の諺解の解釈に取り組む学生が出たこともある。

略号の読み方

太字を採って略号としている。

〈杜初10.17オ〉 『分類**杜工部詩諺解**』 **初刊本10巻17張オ**モテ

〈龍20章〉 『**龍飛御天歌**』 **20章**

〈釋譜 13.4〉 『**釋譜詳節**』 **13巻 4張**

〈月釋1.5註〉 『**月印釋譜**』 **1巻 5張註**

〈訓諺〉 『**訓民正音諺解本**』

参考文献

- 下定雅弘、松原朗編 (2016) 『杜甫全詩訳注 (二)』 講談社学術文庫
 前間恭作 (1924) 龍歌故語箋 東洋文庫論叢 第二
 고령언어연구원 (2006) 조선어고어사전 黒竜江省朝鮮民族出版社
 림종물 (1992) 조선말력사문법 (참고서) 김일성종합대학출판사 고-91-94
 劉昌惇 (1964) 李朝語辭典 延世大學校出版部
 허웅 (1969) 옛말본 과학사

この研究はJSPS 科研費JP17K02962の助成を受けたものです。

